

ときわ動物園における優劣関係の緩やかなトクモンキーの社会関係

綿貫 詩織

【序論】マカク類の社会構造は、優劣関係の厳しさに基づいて 4 つのグレードに分けられる(Thierry, 2000)。ニホンザル(*Macaca fuscata*)は、ケンカの際に劣位個体が優位個体に反撃することがなく、ケンカ後に当事者間で仲直り行動と呼ばれる親和的なやりとりが生起しにくいなど厳格な優劣関係を持つグレード 1 に分類される種である。一方、本研究対象であるトクモンキー(*Macaca sinica*)はグレード 3 とされ、ケンカは双方向的かつ穏やかなもので、群れ内の個体が血縁に関係なく毛づくろいし合うなど優劣関係が緩やかな種の 1 つである。この優劣関係の厳しさの違いは社会関係の違いを創出している。本研究では、ニホンザルに比べ研究が進んでいないトクモンキー社会を知ると共に、優劣関係の厳しさの違いに基づくマカク内での社会関係の種間差を論じることを目的とした。

【方法】観察は、ときわ動物園(山口県宇部市)において、2017 年 9 月 21 日から 10 月 27 日にかけて計 24 日間実施した。個体追跡法によってトクモンキー 2 集団、計 14 頭(A 集団:オトナメス 4 頭、コドモオス 1 頭、コドモメス 1 頭、B 集団:オトナオス 1 頭、オトナメス 2 頭、コドモオス 3 頭、コドモメス 2 頭)の行動観察を 1 頭につき平均 9 時間、計 132 時間 20 分行った。分析には社会ネットワーク分析を用いた。

【結果・考察】0 歳齢から 4 歳齢のコドモ 7 頭の「play (wrestling)」の観察から、トクモンキーのコドモの遊びの特徴が明らかになった。1)トクモンキーは生後半の時期には年長個体との遊びに参加している、2)遊びには性差が見られ、メスよりもオスが頻繁に遊びに参加する、3)メスでは 2 歳齢、オスでは 4 歳齢になるとほとんど遊びには参加しなくなるということがわかった。これはニホンザルのコドモと同じ傾向を示しており、オスとメスの遊びに関する性差は、メスがオスより早く性成熟を迎えるという、性成熟の時期の性差を反映しているものと考えられる。

1 歳齢から 2 歳齢の子ザル 4 頭の毛づくろいにおいて母ザルとの毛づくろいが全体に占める割合は平均 39%とマカクの他種に比べ低かった。この事実は、優劣関係の緩やかなトクモンキーの種特有の自由放任型の子育てによる母子関係の希薄さと、子ザルが母ザル以外の個体と自由に関わり合うことを母ザル以外の個体が許容していることを表している。

他個体と近接している割合と年齢との間に負の相関がみられ、トクモンキーは加齢に伴って 1 頭でいる時間が長くなることがわかった。この傾向は飼育カニクイザルをはじめ多くの種で報告されている。その理由として加齢による好奇心の低下、若齢個体からの近接の減少、地上にいる割合の増加が考えられている。一方、毛づくろい時間と年齢との間に相関はみられず、若齢個体は毛づくろいをするときだけ高齢個体に近づくといいこと、加齢に伴って毛づくろいの受け手になる割合が高くなるということがわかった。

「近接」、「毛づくろい」、「サル団子」、「food sharing」の社会ネットワークの比較から、普段近接したりサル団子形成時に頻繁に隣に坐る相手は子ザル同士や母子などの「気を遣わなくても良い気楽な」個体であり、毛づくろいをする相手は高順位個体や交尾相手などの「媚を売ることで利益のある」個体であることがわかった。さらに、food sharing は、主に子ザルが「接近しやすく頼りがいのある」年長の子ザルに接近して、食物の一部を取ることを許してもらう行動であることがわかった。このように、トクモンキーは相手によって自分の振る舞い、すなわち行動を変えていることがわかった。(比較行動学)